

トマス・ハーディ晩年の成果と フローレンス・ハーディの栄光と苦悩

土屋 倭子

はじめに

この小論はトマス・ハーディの文学における晩年の成果と2番目の妻フローレンス・ハーディとの興味深い関係性に注目し、特に晩年の成果である4冊の詩集の特質を考察し、それらの成立をいわば一体となって支えたフローレンスの栄光と苦悩の生活に焦点をあてる。何故ならハーディ晩年の比類なき成果は妻フローレンスの存在を抜きにしては考えられないからである。ハーディがその死にいたるまで営々として成し遂げた成果はどのようなものであったのだろうか。それを支えたフローレンスの栄光と苦悩はどのような場で繰り広げられたのか。さらにハーディ晩年の自身の作品と考えられるにいたっている『ハーディ伝』執筆に関して、フローレンスが果たした微妙かつ不思議な役割はいかなるものであったのかななどを考察する。

まずⅠではハーディ晩年の第5詩集から第8詩集までを取り上げ、主として思想詩、哲学詩を中心にハーディの思想の核心に迫り、次にⅡにおいてそうしたハーディを支えたフローレンスの栄光と苦悩に満ちた歳月をたどる。また『ハーディ伝』執筆の秘密とそこで果敢に試みられたフローレンスの反撃に注目する。小論はおのずからハーディ晩年の20世紀初頭の世界風土とそこでのハーディの思想の立ち位置を検証することになり、またハーディとフローレンスの微妙な関係性は約100年前のイギリスにおける興味深い夫婦像をも提供することになろう。

Ⅰ ハーディ文学晩年の成果——第5詩集から第8詩集までを中心に

ハーディの最初の妻エマが1912年11月27日に亡くなり、ハーディ痛恨の挽歌“Poems of 1912-13”を含む『人間状況の風刺』⁽¹⁾が出版されたのは

1914年11月のことであった。この時には既にハーディは2番目の妻フローレンスと再婚しており、ハーディにはそこから1928年1月11日に87歳で死を迎えるまでの晩年の歳月が残されていた。エマの死から自身の死までのこの15年余の年月を既に功なり名遂げていたハーディはどのように生きたのか。瞠目すべきはこの晩年の歳月を通して、ハーディが倦むことなき仕事の鬼であったということである。

1917年11月第一次世界大戦の最中に第5詩集『映像の見えるとき』、1922年5月に第6詩集『近作・旧作叙情詩』、1925年11月に第7詩集『人間の見世物』を発表する。そして没後出版とはいえ、ハーディ自身は迎えることがかなわなかった88歳の誕生日に出版を意図して序文まで書いていた第8詩集『冬の言葉』が1928年10月に出版された。また1923年には一幕ものの詩劇『コーンウォール王妃の高名な悲劇』が出版されている。この詩劇は1870年コーンウォールでのエマとの出会い以来、ティンタジェルの舞台や、ヒロインにエマを想定した点からもわかるように、ハーディが長年温めてきたテーマであった。出版直後ハーディは次のように書いている。「53年間胸に温めてきた結果が800行の詩とは、なんともし！」(1923年11月17日 A. Noyes 宛)。

またハーディの晩年にはHardy Playersと称されるドーセット中心に結成された劇団グループによって、ハーディの小説は次々と上演されていったし、『霸王たち』の数場面も上演されることも度々あった。さらに、問題は『ハーディ伝』の執筆であろう。これはハーディ自ら資料を集め、整理して、自分が後世に示したいとする自己像を演出したハーディの作品と考えられている。その資料蒐集や、訂正や、加筆のためにハーディは死の間際まで情熱を燃やした。フローレンス・ハーディ著とされる『ハーディ伝』にハーディが書体まで変えて強く関わった経緯は後世の研究者たちを驚かせた。

ハーディ文学晩年の成果としてここでは、第5詩集から第8詩集までを主として取り上げる。詩集は以上のような多彩な文学活動の主要なものであるが、膨大な詩のなかから取り上げる詩も限られるので、主としてハーディの思想詩、哲学詩を中心にハーディの思想の核心を追求する。

第5詩集『映像の見えるとき』

ハーディは第5詩集の出版について戦時中であることなどから、少し躊躇っていたが、結局1917年11月30日3000部がマクミラン社から出た。この詩集は159篇の詩を含む。Purdyによればそのほとんどはエマの死の直後の1913年から1916年にかけて書かれたものであり、その間にハーディの再

婚と第一次世界大戦の勃発という二大事件があった。出版のときハーディは77歳になっていた。この詩集の初版は「女の中の女、フローレンス・ハーディへ」と献辞が書かれてフローレンスに贈られた。

第4詩集に含まれた亡き妻への挽歌“Poems of 1912-13”はフローレンスをいたく悲しませたが、この傾向は第5詩集にも受け継がれている。この詩集にもエマにまつわる詩が数多くあったことは、妻であるフローレンスをひどく苦しめた。エマはその後の詩集でもハーディのヴィジョンに繰り返し現れる重要なテーマとなっていく。「過去」はハーディの心の中に生き続け、エマも妹のメアリーも父も祖父も、そして彼を取り巻いていた家具も家も、墓の中の人々もハーディの心に蘇ることになる。過去へのノスタルジア、過ぎてゆく時への思いなどはその後次々に詩となって紡ぎ出されていく。

ハーディの思索する心中を示すものとして、かつハーディの哲学詩の代表としてこの詩集の冒頭の詩は興味深い。この詩は詩集の題名となって思索するハーディの内面を見せる。

映像の見えるとき

あの鏡

それは人の内部を透かしてみせる
 一体誰がああ鏡をかかげて
 あなたやわたしの心の中をあらわに
 見せようとするのか？

あの鏡

それは魔法の矢のように貫く
 一体誰がああ鏡をかざして
 わたしたちの精神や心情を映し出すのか
 どきりとさせるほどに？

あの鏡

それは苦悶の夜の時間によく働く
 一体なぜああ鏡には
 わたしたちが真昼間にはけっして染まっているとも思わない
 色彩を映し出すのか？

あの鏡

それは気づかぬ間に人の心を験すのだ
 そうあの不思議な鏡は
 人の末期に去来する思い 醜さも麗しさも とらえるのかも
 だがそれを映すのは——どこだろうか？

人の意識の中に次々と浮かんでは消えていくヴィジョン、それは時空を超えて現れる。まるで意識は鏡のようだ。そこには自分でも気づかぬ映像が浮かび上がり、自分でさえも驚く。このヴィジョンとは何か、そのヴィジョンが映し出される、人の意識とは何か、心とは何か。ハーディは誰が人の心をあらわにする鏡をかかげるのかと問うことで、人間の意識の不可思議さを問うている。それは意識を流れていく時とは何かを問うことでもあった。

「古い家具類」でもハーディは家の中の見慣れた家具の上に、その取っ手や窪みの上に人々の手や指がおかれているヴィジョンを見る。掛け時計にはネジを巻いて慎重に文字盤に触れている指先が見える。古くから使われてきたヴァイオリンにはそれを弾いた祖父や父の指先が踊っているのだ。ハーディにとって家具はただの家具ではなく、家もただの家ではない。心や意識のなかではそれらは過去が生きている、過去を持ったものとして存在している。過去は過ぎ去ったものではなく、現在の中に生きて、その一部となっている。「古い家具類」は家具の中に生きる祖先たちの姿をうたうことで、意識とは何か、「時」とは何かを問うているのだ。

思想詩の範疇には入らないのかもしれないが、『詩歌選』には必ず載っている「雄牛たち」もこの詩集を飾る名詩であろう。これはハーディが幼い頃母から聞いた話に基づいているとされているが、懐かしき古き時代へのノスタルジアをうたう。最後のスタンザで表明するハーディのこの伝説が真実であれかしの願いが痛ましい。書かれたのは第一次世界大戦の激戦の最中の1915年であった。

雄牛たち

クリスマス・イヴ そして時計は12時を指す
 「今牛たちはみんなひざまずいているよ」と
 年寄りが言った ぼくたちみんなが炉端で

残り火を囲んで坐っていたときに

ぼくたちは藁を敷いた小屋のなかの
あの優しいおとなしい生きものたちを思い描いた
そのとき かれらがひざまずいていることを
そこにいる誰も疑うことはなかった

今の時代には誰も思いつくこともないような
あまりにも美しい空想なのだが でもわたしは
もしも誰かがクリスマス・イヴに
「さあ 牛たちがひざまずいているのを見に行こう」

「ぼくたちが子供の頃よく知っていた
あの遠い谷間のそばの淋しい小屋へ」と言ったなら
ぼくは彼と一緒に暗がりのなかを見に行くだろう
そうあれかしと望みながら

1915年

さらにこの詩集でハーディの哲学詩として重要なのが「彼には自分がわからない」であろう。この詩には1893年11月の日付があり、Pinionによれば、この詩は『ハーディ伝』にみられる1893年11月28日の「彼は自らを自動仕掛け人形とみる」(260)に関連するという(Pinion 148)。この時期ハーディは『日陰者ジュード』の構想の最終段階に入っていて、ジュードのことを「私の哀れな自動仕掛け人形」(『ハーディ伝』272)と呼んでいる。ハーディは大きな「宇宙内在の意志」の働きの中で、人がいかに自由でありうるか、いかに自分の意志をそこに働かせることができるのか、「宇宙内在の意志」という必然と「個人の意志」という自由がどのように関わり合うのかという問題意識を常に抱えていた。

彼には自分がわからない

希望を持つことも 絶望して苛々することも 何の役にも立たぬ
上から下から操られて
まるであの絡繰り人形のようにだ

わたしは次の瞬間何をしているのやら！

わたしは明るい瞳に向かって突き進んでいるのだろうか？

わたしは七つの哀しみに苦しんでいるのだろうか？

わたしは大空の星々を眺めているのだろうか？

その一つがあなたに似ていると思って

わたしは大きな「意志」の一部分にすぎない

それらの総体のなかでわたしの部分が

指先ほども諸力の平衡を曲げることができて

そして麗しく公正な願いを実現することができればいいのだが？

1893年11月

必然的な状況におかれた人間の持つ微かな自由こそ大切ではないか、この考えはその後『霸王たち』を通してハーディが主張したことであった（『ハーディ伝』334-35）。この詩集にこの詩が採録されていることは、それ以前からの一貫したハーディの関心と主張をみることができる。この考えは、第6詩集の巻頭の「我が詩作を擁護する」でも繰り返して述べられている。

さらにこの詩集で注目すべきことは「戦争と愛国心の歌」としてまとめられた一群の戦争詩であろう。これらは第一次世界大戦の勃発にともなって発表されたものを中心にしたものである。ハーディはボーア戦争に際しても幾篇かの優れた戦争詩を発表しているが、『霸王たち』も言ってみればナポレオン戦争についての壮大な戦争叙事詩であるし、『ラッパ隊長』にも戦争が描かれるから、戦争とハーディの関係は重要である。ここでは紙幅の関係で3篇を取り上げるにとどめるが、そこに籠められたハーディの反戦思想は21世紀にも通ずる達見であり我々の心に突き刺さる。

彼の故国

私は生まれ故郷から旅をした

輝く南の海を越えて

そしてわかったことは人々が

大きなお屋敷や賤が屋で

私と同様に働き苦しんでいることだった

牧場や市場でそんな人たちを見ていると
私には思えなかったのだ
私の愛しい故国が その様々な心や精神や憧れや
その優れた部分も悪しき部分もともに
海岸線で終わっているなどとは

私はさらに奥地へと進んで行った
そんな人々にずっと気づきながら
そしてさらに奥地へ奥地へと——そう ずっとずっと
そして私が目にしたあらゆる人たちは
私の同胞と同じ心の琴線を持っていた

帰り道は地球をぐるりと廻り
反対側から故郷を目指した
そして思った「私の国籍はどこで境となるのか？
その範囲は世界中に
広がっているように見えるのに」

私は自分に問うてみた「私は誰と戦わねばならないのか
誰に立ち向かっていかねばならないのか？
誰をやっつけ叩き潰し損なわなくてはならないのか？
私の故国は道すがら目にする
いたる所に広がっているというのに」

1913年

1914年8月3日イギリスはドイツが中立国ベルギーを蹂躪したことを怒って、第一次世界大戦への参戦を決断し、これはハーディに衝撃を与えた。イギリス全土がドイツに対してトーチカと化したといわれるほど、対独関係は悪化し、熱狂的な愛国主義がイギリス全土を覆った。そうした中で書かれたのがこの詩なのだ。戦争へと雪崩をうって流れる世論の中で、1911年6月26日ハーディはJohn Galsworthy宛に書いている。飛行機など新兵器の開発に反対の署名を求められたハーディはその武器の開発に反対だということは他の武器による戦争なら続けても良いということかと述べ、「私はその点

に関しては極論主義者の一人です。私は20世紀の人々が対話のかわりに軍事力でもって事を解決しようとするなど、狂気の沙汰と考えるからです」と続けた。世論がそろって反ドイツへと向かうなかでハーディは次のような詩を書いた。

英国より 1914 の独国に与う

「おお イギリス奴 神が汝を罰するように!
 それがあドイツの天才が
 旧き友に向かって
 吐き出す悪の言葉なのか?
 —ぼくらはきみらのパンを食べ きみらはぼくらのパンを食べてきた
 ぼくらはきみらの城塞や緑濃い松林を渡る風を愛してきた
 麗しいラインの流れ 岸辺に立つ高い塔の数々
 不滅の才能に恵まれたきみらの輝ける魂は
 まるで同国人のようにぼくらを魅了してきた

ぼくらはきみらの血を流すことなど夢にも思ったことはない
 ぼくらは悪意をもってきみらに対抗しようとしたこともない
 ただぼくらと同様にきみらも気づいているように
 興奮した二三の者どもが人々の意向に反して
 騒々しい声をあげているだけなのだ
 だがきみらは顔を真っ赤にして叫ぶ
 「おお イギリス奴 神が汝を罰するように!
 かくしてこれからの歴史においても また現在の場面でも
 君ら自身の古くからの名声を汚しているのだ
 1914 年秋

1914年9月初めハーディはC. F. G. Mastermanが主催した戦争に対するイギリスの大義を主張する文学者の会に出席した。そこにはBarrie、Galsworthy、Chesterton、Arnold Bennett、H. G. Wellsらが参加していた。1915年3月23日のハーディのヘニカー夫人への手紙は戦争への激しい憤りと、それが名詩「残念なこと」へとになっていく生成の場をうかがわせる。「私も貴女と同様にドイツ国民は一国民として満足して幸福に暮らしていると

思っています。ただ一群の独裁者や兵器や軍需品の業者らが、戦争で利益を得るものだから、国民を彼らの目的のために煽動しているのです——少なくともそう見えるのです。私はこのことをソネットに表しました。フォートナイトリ誌に掲載されます」。それが「何とも残念なこと」であった。

何とも残念なこと

鉄道からもハイウェイからも遠く離れた
ウエセックスのローム層の小道を歩いていると
「お前は～だ」「あいつは～だ」のような
遠い昔言葉が聞こえてくる

「わしは～つもり」とか「あいつは～はず」といった似た言葉も
近くから聞こえてくる 喋っているのは今このとき
まさにイギリスを守ろうとしている人たちだ
脅しと殺戮を栄光と心得る悪党どもが戦を起こしたために

するとある心が叫ぶ 「こんなことの原因になっている者はたとえ誰であれ
同じ祖先を持ち同じ言葉を話すわれわれに
この炎をなげこむやつら

彼らの名はおぞましく醜悪で不吉であれ
彼らの縁者の名は忌み嫌われよ
そして彼らの一族は永遠に抹殺されよ」
1915年4月

1917年2月8日の日記にハーディは書いた。「愛国心はその狭義の意味からはなれて全地球規模にまで及ばないかぎり平和の実現は難しい」（『ハーディ伝』375）。1918年8月15日のGalsworthyへの手紙でも、「自分は相手国のことをあまりにもよく知っているから、愛国心をあおる上手な詩など書けない」と洩らしている。ハーディがこの問題をいかに真剣に考えていたかは同じくGalsworthyに宛てた1923年4月20日の手紙からもうかがえる。「私はたしかに時期尚早ではありましたが、南アフリカ戦争が起こったとき、愛国心というものが地域に限定されるものではなくて、地球規模で持たれるべ

きだと主張したのですが、今もそういう考えが広まるべきだと思います」と。

第一次世界大戦の惨禍はハーディの心身を消耗させた。さらに、第5詩集『映像の見えるとき』に対する酷評は彼を苛立たせた。第6詩集冒頭の「我が詩作を擁護する」はそれに対してハーディの自己の立場を改めて主張することであった。大戦中、1916年にはイースター蜂起があり、1917年にはロシア革命が始まっていたが、これらについてハーディはあまり触れてはいない。

第6詩集『近作・旧作叙情詩』

1922年5月23日にマクミランから出版された第6詩集には151篇の詩が含まれる。フローレンスに捧げた「ときどきほくの思うこと」は有名だが(後述)、エマに関する詩も20余篇ある。半数はその頃書かれたものだが、若い時代の詩もある。愛や時の移ろいをうたった詩や一篇の短編を読むような展開を見せる物語詩などもあり、中味は多彩である。80歳をこえてハーディは詩人としてますますその本領を発揮していった感がある。

ここではこの詩集の冒頭を飾る、ハーディ唯一の詩論である「我が詩作を擁護する」を取り上げ、そこで展開されたハーディのメッセージについて考える。ハーディにとって初めての試みともいえるこの詩論は難解さでも知られているが、この時点にいたって、なぜ80歳を超えたハーディがこのような初めての試みに挑んだのかに意味がある。

「我が詩作を擁護する」はハーディの己の文学の弁明であり、その目的は文学とはいかにあるべきかという自分の立場をあらためて主張することであった。『映像の見えるとき』への批評家たちの無責任な批判にはハーディは心底腹を立てていたから、何としてでも、自分の文学に対する立場を明確にしておきたいという信念があったのであろう。

文学者としてのハーディは処女作『貧乏人と淑女』以来、一貫して、人間、自然、社会、宇宙の有り様を問い続けてきたと言えよう。人が真摯に自分の生き方を考えるとき、人間、自然、社会、宇宙の有り様という根源的な問題を問わないで、それに対する自分の哲学を持たないで生きることは出来ないし、ものを書くことはできないというのがハーディの立場と言えよう。ハーディにとって人間は人間としていかに生きるべきかが問題であり、彼の文学はそのような問いに答えを求める模索であった。『霸王たち』の主題もそこにあった。「宇宙内在の意志」とハーディが呼ぶある不合理な大きな力が働き、その力によって末端までがまるでクモの巣のように揺れ動き、影響を受け

るとすれば、「暗闇のなかで」IIでハーディがうたうように「最悪を直視して、改善への道に向かう努力をすることこそ大切なのではないか」。ハーディの主張はその一点にむかって収斂する。しかしハーディのこの主張は小説でも詩歌でも、ペシミズムの一言で片付けられてしまい正当に評価されることはなかった。

そもそもハーディの文学はそうした自己の信念の吐露であり、彼のキャリアは真実を語る彼の文学に対する批評家や世間の批判との戦いであった。国王を首長とする英国国教会体制の中であって、1890年こう記している。「私は50年間神を探し続けてきた。もし神というものが存在するのなら見つけていたはずだ」と。ハーディは神に代わって人と自然と社会と宇宙の有り様を動かしているものは何かを問い続けた。そして様々な思想家や哲学者の考えに真剣に取り組んだのである。「私の書くものはただの印象にすぎない」(『ハーディ伝』373)、「私には哲学などない」(『ハーディ伝』410)と何度も弁明しながらも、ハーディがSpencer、Huxley、J. S. Millなどなどにいかにか精通していたかはよく知られている。

「あなたの思想はHenri Bergsonのelan vitalの考えに近いとC. W. Saleebyに訊かれたときハーディはベルグソンを詳細に読んで、論破し、「ベルグソンの意見を批判せずに入れて、ベルグソン主義者となれたらどんなに楽か、(多分自分はそうならないが)」と述べている(1914年12月21日、1915年2月2日、1915年3月16日Caleb Williams Saleeby宛)。1917年3月の『ハーディ伝』にみられる次のような言葉はハーディの内面の考えの吐露と思われる。「今日において「神」という言葉には50もの意味が考えられて付加されているが、そのなかで唯一理性的に考えることができる意味とはそれがなんであれ物事の起因というものであろう」。ハーディはその力は道徳的なものでも、不道徳的なものでもなく、非道徳的なものだと言う。そうした力に操り人形のように振り回されざるを得ない人間はどうしたらよいのか。そこで最悪を見つめようというハーディの立場があるのだ。

1920年12月20日、Alfred Noyesへ送った手紙でも、『映像の見えるとき』への批判に対してハーディは自分の立場を説明して誤解を解こうと努めている。

私はこの力(宇宙を司る力)を空想の中や想像の産物である詩の中で、ありとあらゆる名で呼んでおります——それが空想上のもの以上として受け取られることなどを想像したこともありません。詩集の序文などでも、それらがただの瞬間の印象にすぎないことを、事実ただ気持ちを吐き出

したものに過ぎないことをあらかじめ警告しております。しかし、あまりにも知的な読者を想定したのが私の間違いでした。そして人々は私が本気で、原初の力（宇宙を司る力）が、悪意にみちた年寄りの紳士であるとか、ダオメー王のような者だと信じていると思っているのです。それは私の考えていることとはあまりにもかけ離れていて、まったく滑稽ですらあります。『そんな読者のために書くとはなんと愚かなことか』ですな。人生の終末に至った者がこんな思いを抱かざるをえないとは、なんと！(The Collected Letters Vol. VI, 54.)

しかし第一次世界大戦の惨禍とその後の不安はハーディを打ちのめした。「我が詩作を擁護する」はこうした状況のなかで書かれた。現在のイギリス詩や文化全体のおかれている絶望的な状況を嘆き、時代の思潮が暗黒時代を迎えていると警告した。

人間の諸性質が変化でもしないかぎり、より良い未来が訪れると推測することなどほとんどできないであろう。実際今日の芸術、文学、思想を考えてみても、まず明るい見通しは望めない。今回の大戦の恐ろしい狂気によって若い世代の精神が野蛮になってしまったのか、あらゆる階層の人々の間に恥も外聞もない利己主義がはびこってしまったのか、人間の叡智が失われ、ただ知識のみが過剰になったためか、「過度な刺激を求める卑しい欲望が跋扈している」ためか、あるいは何かほかの原因のためか、我々は新しい意味での暗黒時代の到来に直面しているように思われる。(The Complete Poems, 560)

こうした不安に立ち向かうにはどうすればいいのか。ハーディは「我が詩作を擁護する」の終わりで、詩と純文学と理性ある認識に支えられた宗教的な心情の大連合が、希望となるのではないかと夢見ていると述べている。

ハーディのこの希望は1925年2月7日のFrederic Lefevre (1889 - 1949、『霸王たち』の仏訳に関わった)との対談でも繰り返し主張されている。ここでハーディは「合理精神と宗教の同盟関係」とか「ドグマを抜きにした宗教」という言い方をしているが、「私は宗教という言葉で、宗教的なスピリットを意味しているのです」と説明している (Gibson 218)。そしてその宗教的な精神というか心情といったものは詩歌と純文学によって培われるというのがハーディの主張である。そこにこそ詩や文学の存在価値があるというのがハーディ

の言いたいことであろう。そして自分の文学はそれを実践してきたと。ハーディは詩歌や文学によって涵養醸成される人間性、自然や宇宙に対して見開かれる畏敬の念、人類同胞への愛などの心情が開花し、陶冶されると信じたのである。「我が詩作を擁護する」はハーディのマニフェストを集大成して述べたものである。

だからハーディは基督教の非合理的なドグマや教義には終始批判的であったが、教会がもつ道徳的かつ倫理的な存在理由を否定はしなかった。1922年10月のある日、ハーディとともにステインスフォード教会を墓参に訪れたBrigadier Morgan はハーディから聞いた次のような言葉を残している。「私は教会に通うことの意味は信じています。それは一つの訓練であり、人々には何かが必要なのです。もし田舎の村に教会というものがないのなら、村には何も無いということになりますから」と(Gibson 178)。

ハーディの思想を簡単に腑分けすることは難しい。何故なら、ハーディ自身が思想、哲学、科学といった多方面の書物を読み、必死で彼なりに消化し、それらを作品の中で統合し調和させようと試みているからである。1916年4月16日のGalsworthy宛の手紙で自らを“a miserable reasoner”と呼んだハーディはまた1924年6月21日付けのErnest Brennecke宛の手紙で書いた。「私の書いたものはDarwin、Spencer、Comte、Hume、Millなどなどの考えのハーモニーを示しているのです。(あなたはSchopenhauerとの近さをおっしゃっておられるが)彼と同様にこうした人々との近さも触れられるべきです」と。ハーディはいみじくもハーモニーという言葉を使っているが、それはハーディが懸命に試みた思想家、哲学者、科学者らとの対話と苦闘のあとを示す意味深長な言葉として理解すべきであろう。

第7詩集『人間の見世物』

『人間の見世物』はPurdyによれば1925年11月20日マクミランから、クリスマスを目指して出版された。152篇の詩が含まれ、5000部という詩集にしては多い部数の出版であった。この詩集の題はハーディ自身が決めたもので、詩は大体がその頃の作品であるが、題材には古い日記や手紙やノートから採られたものが多くなっている。これはハーディ生前に出た最後の詩集となり、この時ハーディは85歳を過ぎていた。ハーディの自然観をうたった詩や一篇の物語を読むような詩も多いが、エマを扱った詩も依然として20余篇ある。ただエマとの希有な出会いの幸福をうたった詩だけではなく、「オート麦が収穫されて」のようにエマもまた自分を深く傷つけたという、

怨嗟の思いがうたわれてもいる。

詩集は老いと死を主題とするものが多くなる。ハーディにとって自らの老いや死が次第に現実的な実感として体感されていく様子がわかる。しかし注目すべきことはそれぞれの詩で試みられる大胆な実験であろう。詩の言語、構造、韻律など、主題と形式の一致を模索する詩人ハーディの意欲は読者を圧倒する。85歳にしてハーディはなおも実験を続け、彼の名声にふさわしい優れた詩集を出版したのである。ここでは哲学詩として、ハーディが「時」をうたう一連の詩を取り上げる。

老いゆく己を否応無くうけいれざるをえないハーディにとって「時」とは何かという問いは常に心を占める問題であったろう。「〈絶対〉が説明する」で絶対者は「時」とは刻々と過ぎ去る現在にあるのではないとする。絶対者という形を借りて、ハーディは「時」が過去、現在、未来へと続くものであり、絶対者の目から見れば現在はほんの一瞬のこと、人間がたまたま目にする幻にすぎないとする。その III-V スタンザを見る。

III

あなた方の「今」は微かな光 滑りゆく点
 あなた方の凝視する感覚をよぎるだけ
 わたしにとっては「過去」も「未来」もいつも存在する
 それらはやって来るものでも行ってしまうものでもない
 だからそれらはけっして無くならないのだ

IV

真っ暗なハイウェイを
 灯りをともしてとほとほと歩く者のように
 その微かな灯りのとどくところだけが
 彼の目には見えるだけ
 あたりは真っ暗闇だから

V

その道はずっと長く延びている
 前にもそして同じように後ろにも

だからあなたが「現在」と呼ぶものの外に
「未来」と「過去」がはっきりと
つながって連綿と続いているのだ

ハーディのヴィジョンの中ではこうして時は続き、過去はいつまでも美しい姿のままに生きている。この詩の続編とも言える「こんな訳で、時よ」は次のようにうたわれる。

こんな訳で、〈時〉よ
(同じ考えを再び)

そこで〈時〉よ
王者のように 崇高なもの
今日までそう考えられてきた
主人であり 敵であり
私の〈愛〉の対象の盗人
彼女を嘲りの的にしてきた
正当な哲学者は
今こそ断言するぞ
お前はなんの現実性も持たない
ただの思い
それ以外の何ものでもない

新しい愛 昔の愛
情熱的な愛 冷めた愛
あらゆる愛の名残りはかくして
今も永遠に生きている
現実の歩みを超えて
たしかな永遠性をもって
ただのひとときのことではなく
空漠のなかにしっかりと
初めから終わりまで
遥けくも またわがすぐ傍に

ハーディのヴィジョンの中で時は永遠に生き続ける。「ほら、自分の心の鏡をのぞいてみればそうであろう」というハーディの声が聞こえてくるような詩である。実際〈時〉とは何か、〈時〉をどのように考えればよいのか。ハーディは次のような詩も書いている。

一時間の歴史

韻を踏んで詩にうたおうと試みたり 文字で表そうとしても無理
 それがどんなものか ペンで表現することはできない
 書き綴ろうとしても時間の無駄になるだけ
 その理由は明らかだ!

そう それは魂に満たされ あまりにも靈妙
 六月の朝の花盛りの薔薇の香りを
 目の粗い麻の網袋が捉えられるというのか
 あの一時間が捉えられるというのか!

このように自分の意識を凝視するハーディにあってはいわゆる「意識の流れ」の手法を試みた小説の世界は意外に近いといえるのかもしれない

1924年夏に書かれた「ある拒絶」はこの詩集におけるハーディの「我が詩作を擁護する」に相当する。ハーディは1924年7月14日のタイムズ紙に、著名な文人や政治家らと共に没後100年を記念してバイロン卿の記念銘板をウエストミンスター寺院のPoets' Cornerに設置してほしいという請願書を載せた。しかしこの願いはその時のHerbert E. Ryle Bishopによって拒絶された。そのことに対する怒りと揶揄をBishopの立場に立って書いたのがこの詩である。Bishopの頑固で蒙昧な立場を皮肉に扱うことで、ハーディは実に巧みにBishopを愚弄し、嘲笑の的にした。英国国教会が愚弄されたのである。さらにバイロンのみならず、ウエストミンスター関係者から目の敵とされているSwinburneやShelley(これらの詩人たちからハーディはその不可知論思想の多くを学んだ)らの名前をもあげることで、Bishopらを愚弄する自分の立場をいっそう鮮明に表明したのである。ハーディはこのとき85歳になっていた。

第8詩集『冬の言葉』

『冬の言葉』はハーディの死(1928年1月11日)の後、1928年10月2日にマクミランから出版された。105篇の詩が含まれ、ほとんどが第7詩集『人間の見世物』(1925)以後書かれたものである。フローレンスによればハーディはこの詩集を1928年6月2日の自分の88歳の誕生日に出版するつもりで、序文も書き、かつ最初と最後の詩の順序も決めていたらしい。死が遠くないことを自覚していた彼はこれが多分最後の出版物になると予想していたのであろう。最後の作品は「彼はもう言うまいと決心する」としていた。その一つ前の詩「我らは終末に近づいている」と共にこれらの詩は哀しい辞世のうたとなっている。

序文ではハーディはあらためて自分の詩集がいかに正当に評価されてこなかったか、真面目に読むこともしないでペシミズムの名のもとにいかにも非難されてきたかについての怒りを表明している。そして本書もおそらくそうした批評にさらされるであろうことが容易に予見できると述べている。これは「我が詩作を擁護する」で主張されたことでもある。そして繰り返しになるがと断った上でまた書く。「私はまたもう一度繰り返してこのような機会ごとに述べてきたことを申し上げたい。つまり、以下のページにはなんら調和のとれた哲学などは述べられてはいない——この点に関しては、過去の全作品についても同様である」と。このように繰り返し述べるハーディの内実は「我が詩作を擁護する」などでみてきたとおりである。

この詩集にはハーディが自分の老いをうたった詩が多く見いだされる。また哲学詩としては「哲学的ファンタジー」や「酒飲み歌」が重要だ。名詩選を飾る「しだの茂みのなかの幼年時代」もこの詩集に含まれる。Purdyによればこの詩集にはハーディの約60年に及ぶ文学的キャリアのほぼそれぞれの年代からの詩がおさめられ、また飽くことなき詩作の実験も試みられて、詩人ハーディの掉尾を飾るにふさわしい詩集となっているという(Purdy 262)。少年時代のジュード(『日陰者ジュード』)を想起させる「しだの茂みのなかの幼年時代」の世界を覗いてみよう。ここでのハーディは幼いジュードと重なる。

しだの茂みのなかの幼年時代

ある小雨の降る日 わたしは草原に坐っていた
わたしの周りには丈の高い羊歯の茎が豊かに茂り
それ以外は何も見えなかった

雨は強くなって だらりと垂れた葉を濡らし
わたしのそばのあちこちの茎を伝って流れ落ち
小さな小川のようになった

わたしは誇らしげに わたしの水しぶきを上げる家を見た
やがて雨粒が緑の垂木を突き抜けるだろうが
わたしは雨に濡れないとでもいうように坐っていた

それから太陽が照りだし 甘い香りが
乾いていくその柔らかな羊歯から匂い立った
わたしは言った「ここに死ぬまで住むことができたらいいなあ」

そしてその緑の囲いのなかに坐りながら思った
「どうしてわたしはこの騒々しい〈世の中〉に出て
大人というものにならなければならないのか？」と

この詩集の「哲学的ファンタジー」はそのタイトルが示すとおり代表的な哲学詩である。この詩は『フォートナイトリ・レビュー』の1927年1月号に発表された。『ハーディ伝』によれば「ハーディは一流誌や一流新聞にこういうタイプの自分の詩が掲載されるというかたちで新年が明けることが気に入っていた」とある(436)。詩の冒頭のWalter Bagehotのエッセイ「ジョン・ミルトン」からの引用「ミルトンは神に議論をさせた」がこの詩の主調になる。

「宇宙内在の意志」あるいはその主因者に対してなぜ果たされない意図というものがあるのかと詩人が問い、それに意志が答えるという形式で、一種の対話のように詩は進められている。ハーディは独自の皮肉な手法で神のやり方をミルトンに準じて批判する。ハーディの神はミルトンのような、信仰心に基づいた擬人化された神ではない。宇宙の諸力の主因となるある力、『霸王たち』でハーディが語る「宇宙内在の意志」であり、その意志には何の目的

も無く、道徳観も無く、その意図が果たされないことも当然あるが、それを気にかけることも無いと言う。これはまさに『霸王たち』で展開した考えであり、この果たされざる意図とは『森林地の人々』7章でも問題にされている。詩の終わりの部分で「意志」はうたう。

いや たしかにわたしは 人間という種族に
親切も愛も与えてはこなかった 与えたのは
ただの無関心だけ たしかにその状態は終わりそうもないが
それでも改善へと向かうかもしれぬぞ

こうしてこの詩は微かな希望を見せて終わる。まさに『霸王たち』の最後が次のように締めくくられるように。

合唱

しかし——あるどよめきが大気をゆるがす、
長い歳月の
暴威が消され、
過去の邪悪からの救いもたらされ、
「意志」が意識にめざめ、やがて万物を美しく作り成すという
その喜びのひびきにも似て! (長谷安生氏訳による)

『フォートナイトリ・レビュー』1927年1月号を飾った自分のこの詩をハーディはさぞ満足して眺めたことであろう。それは彼の永年の思索を、知的な凝った詩型に凝縮したものであったから。

「酒飲み歌」と題された9節に及ぶ、各節に合唱付きのこの詩は酔っぱらって歌うように仕立てられてはいるが、その内容はあまりにも深遠である。この詩は短いなかに、人類の知の歴史、宇宙観の歴史を総括する。単純な天動説を信じていた宇宙観がコペルニクスによって地動説に変わり、David Humeによって神の奇跡が否定され、Charles Darwinの進化論によって人類は他の生物と共通の先祖を持つ、すなわちわれら生物はみな兄弟だという主張がなされたとうたう。そしてCheyne博士は処女からイエス・キリストが生まれたのは非合理的だと弾劾した。そして今まさにEinsteinは難解な相対性理論を確立して、宇宙の根本原理を見つけようとしている。(ここで飲んでいる者らにはまだあまりよく理解されてはいないが)とことわり「こ

の世界には時間も空間も動きもない 速い遅いもない 四角もなければ直線もない あるのはただ 一種の曲がった大海原だけ」とうたう。最後の連は次のように終わる。

そこで今われらは哀れな状況さ
 色鮮やかな
 蝶々のように
 アルプスの氷河のうえで
 縮こまってひらひら飛んでいる
 どこかに暖かな隠れ場所を見つけようと

杯に酒を満たせよ 嘆くのはよせ
 われらの偉大な思想が駄目になったからとて
 それでもわれらはなんとか善をなさん!

歌は絶望ではなく、微かな希望で終わる。アルプスの極寒の山々のなかで、色だけは鮮やかだが、寒さに今にも凍え死にそうな、か弱い蝶として描かれる人類ではあるけれど。ハーディは早くから Einstein についても勉強しており、1908 年末に『霸王たち』の最終部分が出版されたとき、質問に答えて、『ハーディ伝』で次のように書いている。ハーディは神を悪意に満ちた悪魔のようなものと信じていると非難する人々にたいして、彼はそのようなことは考えたこともないのだとしたうえで、「ただ事物の背後には『善も悪も考えない』ただ無関心で無意識な力があるだけである。彼（ハーディ）の考えは実際スピノザの考え——そして最近ではアインシュタインの考え——に非常に近いのである。つまり宇宙を支配しているのは〈偶然〉や〈意図〉ではなく〈必然〉であるということだ』（『ハーディ伝』337）と述べている。さらに 1919 年 12 月 31 日の Dr. J. Ellis MacTaggart に宛てて書いている。「実際彼（Einstein）が述べていることを考えると宇宙はあまりにも喜劇的で言葉にならない」と。ここには氷河の上を飛ぶ蝶のように途方に暮れたハーディがいるのだが、酒飲み歌としてこのような途方もない内容を持った歌をイギリス人は実際どのように受け止めて酒の席で歌うのであろうか。⁽²⁾

『冬の言葉』の最後におかれた 2 篇の詩はハーディが意図してそこにおいてのものである。それらはハーディの辞世のうたとも言える。その前にもう一篇、恐ろしい短詩がある。「1924 年のクリスマス」というこの詩は 1924 年のクリ

スマスに書かれ、没後の1928年6月18日の*Daily Telegraph*に発表された。「地上に平和を」と題されて (Bailey 618-19)。

1924年のクリスマス

「地上に平和を!」と唱えられ 我々はそう歌う
 そして平和を祈って 百万の聖職者らに 喜捨をする
 二千年間ミサをし続けてきて
 我々は毒ガスまでも手に入れてしまった

この短詩が示す揺るぎない事実に読者の心は震える。ハーディは第一次世界大戦後、世界の状況が新しい火種をかかえこんでいることを、つとに憂えていた。再び戦争となる危険を所々で述べている。その不安のなかでこの詩は書かれた。

詩集の最後から2番目の「我らは終末にいま近づいている」も戦争への不安と未来への絶望を歌ったものである。この詩は没後1928年5月28日の*Daily Telegraph*に掲載された。第一次世界大戦の終結後からハーディは次の戦争への不安に打ちひしがれていた。1919年5月7日のGeorge Douglas への手紙では「戦争の終結など期待できない——もし終結したとして、そう望みたいところですが、また将来再び戦争が始まるのをどうやって阻止すべきか私にはわからないのです」と書いた。1920年代を通してハーディの戦争への不安は高まりこそすれ弱まることはなかった。1925年2月7日のFrederic Lefèvreとの対談でも、「(戦争というものは) なんとという愚かさ、愚劣さ! 戦争は悪だし、戦争は悪を生むだけだ。戦争が芸術になにか良い効果をもたらしたなどと言う者など許せない」(Gibson 218) と語っている。

我らは終末にいま近づいている

我らはこの世界で
 悪は時々あっても 善が続き
 人類は理性によってより良くなっていくという
 そんな不可能を夢見ることの終末に近づいている

籠のなかの雲雀でさえ

生涯閉じ込められた霊柩車の呪いから
逃れられないことも知らず歌うように
我らも発作的に快樂を追い求めるのか

そして国と国が歩兵や騎兵で 隣国の遺産を荒廃させ
その美しい山河を膿みただれた傷跡に変えるときに
彼らは再びそうするであろう——意識していなくても 好んでいなくても
なにか悪魔のような力に駆り立てられて
そうだ 我らは希望を持つことの終末に近づいている！

ハーディは理性、進歩、より良い未来の終焉を哀しくも宣言している。

そして最後の詩「彼はもう言うまいと決心する」がある。これはハーディが詩集の最後におくように決めていたものだが、そこにはなんとという苦悶に満ちた言葉が書かれていることか。

彼はもう言うまいと決心する

おお わたしの魂よ 残りのことは知らせないでおう！
それはあまりにも呻きに似ているから
死人の目をした蒼ざめた馬が
近づいてくる今
そうだ 誰にもわたしが秘めることを推測させまい

どうして既にありあまる苦悩を抱える人々に
もっと多くの重荷を与える必要があるか？
今からずっと
最期の日まで
わたしには見えることをわたしは言わない

時が過去に戻りたければそうすればよい
(魔術師なら真夜中にペンを走らせて
頭をかつかと火照らせて
それを見ることもできようが)
わたしは自分がわかったことは誰にも知らせない

そしてわたしの描くヴィジョンが
 目隠しされた人々の目には見えないけれど
 ——真理によって目を開かれた——
 わたしは全てをそのままにしておこう
 そしてわたしのヴィジョンを誰にも見せることはしないつもりだ

この詩は1927年、まさにハーディの死の前年に書かれた。発表は没後の1928年9月18日の*Daily Telegraph*であった。こうしてハーディは死の直前まで詩を書き続けた。

晩年の4詩集も含めて『トマス・ハーディ全詩集』には947篇の詩が収められている。この膨大な詩群はその質量ともに今日においても読者を圧倒する。それぞれの詩の興味深く意味深長な内容といい、そこで試みられた様々な言葉の実験といい、その全貌はまだ十分に解明され、理解されているとは言えない。読者の前に今なお聳え立つ前人未到の高き峰である。

II フローレンス・ハーディの栄光と苦悩

ハーディがフローレンスに贈った一篇の詩がある。”For F. E. H.”という献辞を持つこの詩は第6詩集『近作・旧作叙情詩』に収められていて、ここにはハーディのフローレンスによせる切々とした思いがうたわれている。

ときどきぼくの思うこと
 (F, E, M. へ)

私は時々ここに坐って
 自分がしてきたことについて考える
 それらはお日様に顔が向けられないようなものでは
 なかったと思う
 だがそんなことに誰ひとりとして
 注目してくれなかった——誰ひとりとして

あれほど熱心に気負い立って
 改革のために良き種子を蒔こうとしたのに
 あれほどに人々を困窮から救出しようと努めたのに

まさに必要なときに
 荒野であれほど声をあげたというのに
 誰が耳を傾けようとしただろうか？

だがこれだけは間違いのない真実 そうでしょう？
 ただ一人だけは心に留めてくれた
 そして私の家のあちこちに妖精のように現れ
 風のように階段を通りぬけ
 いつもそしてこれからも 全てに心遣いをしてくれる
 たとえ私が絶望することがあっても

Bailey によれば自分がなしてきたこととは、ハーディが『ハーディ伝』のために集め始めていた資料と関連しての言葉かもしれないし、また良き種子を蒔くとは『日陰者ジュード』などでの社会や体制の改革への発言を指しているのかもしれないと言う。またまさに必要なときに救助の手を差し伸べたのは第一次世界大戦時のベルギー人を救助しようとした活動を表し、荒野での声とは第一次世界大戦後の国際間の紛争に対するハーディの不安の声を意味しているのかもしれないと言う (Bailey 435-36)。

こうして時に絶望感にとらわれるハーディにとってフローレンスは guardian angel のように感じられたのであろう。エマ亡きあとハーディ自身が死を迎える約15年間、ハーディは年齢を感じさせない充実した創作活動を続けることができた。多くの批評家が指摘しているように、もしフローレンスがいなかったら、彼女の支えがなかったら、彼の成果は今のようなものにはならなかったであろう。フローレンスはハーディの最晩年を支え、彼の文学を最高に花開かせた。

それならフローレンス自身はどのようにハーディを支えたのであろうか。ハーディと結婚し、その栄光と苦難のはざまの日々を過ごしたフローレンスの歳月をたどることは、ハーディ文学晩年の成果生成の場にあらためて光をあてることでもある。

結婚とエマの亡霊との戦い

1912年11月27日のエマの死は結果的にその後のハーディとフローレンスの生活に思いもかけない変化をもたらすことになった。それから約1年2ヶ月余経った1914年2月10日午前8時という人目につかない時間を選んで二

人はひそかにフローレンスの実家のあるエンフィールド教区の教会で結婚した。ハーディ73歳、フローレンス35歳であった。ハーディの名声を考えて、異常なほど内密にことは進められ、式に列席したのは弟のヘンリー、フローレンスの父と一番下の妹のみであった。

それまでの経過をみると、エマの死後フローレンスは妹のメアリーと共にすぐさま喪の家に呼ばれ、その後も滞在してハーディを助けていた。ハーディにはフローレンスの助けが必要だったのだ。エマの死後残された「ぞっとするような悪意に満ちた日記」や *Some Recollections* から受けた衝撃のために慚愧の念に駆られてコーンウォールへの旅に出て、溢れるようにエマの詩を書いたハーディであった。だが他方ではその頃フローレンスに次のような手紙を送っていたことはあまり知られていない。

もう一度あなたがここへやって来たら、あなたをしっかりとつかまえて離しませんよ。あなたは春までここにとどまって下さい。昨日はとても哀しくて淋しかった。今日は少しですが。(1913年1月29日)

私はまだあなたの咳のことをとても心配しています。明日早くゴウリング医師が診察に行ってくれると思います。そう頼んでおきましたから。(1913年3月9日)

なんでも自分でやろうとして、お転婆さんだね (naughty girl)。(1913年4月26日)

そして1914年1月29日、結婚の直前だが、「ここのお天気は西北から霧雨が降っています。私はほとんど書斎にこもっていて、家の中はとてもひっそりとしています。まあ私はなんとかやっていますが、いつもあなたが恋しくてたまりません (下線筆者)」と書いた。

それまでの経緯からして、当事者の二人にとって結婚は自然の成り行きであったと考えられるが、二人とも周囲の目を非常に気にしていたことが、次のような手紙から推察できる。ハーディは結婚式の翌日 Sydney Cockerell に書いた。「私たちはそうするのが(結婚)もっとも良いことだと思ったのです。何故ならフローレンスは私にとってもっとも役に立つ右腕となっていましたし、今まで通りことがなんら断絶なく続いていくのがわかっていますから。彼女は妻のこともよく知っていましたし」。

そして結婚翌々の2月13日には Lady Grove に秘密裡に慌ただしく行われた結婚式でしたが、と断りながらも「それは気持ちよく晴れた日で、静か

な古びた教会でした。それに私たちもロマンスがなかったわけでもありませんし」と書いた。そして次のような説明を付け加えた。「ただ新聞関係の人たちのことがありましたので、私たちは親類にさえ知らせませんでした。彼らも友人たちも判ってくれると思ったからです。私たちが家を去って1時間後には、義父の家のドアを26人の記者が叩きましたよ。私たちは危うく難を逃れたということです!……私の新しい妻はもの書きですが、ブルー・ストッキングではありません」と。

ハーディはヘニカー夫人にも、結婚式の翌日に手紙を書いている。新聞より先にあなたにはお知らせしたかったのにと断り、とても内輪の式だったので、なんと8時20分には終わりましたと知らせている。さらに3月6日にも次のようにしたためた。「あなたのような方までが、私たちの取った(結婚という)手段に驚いていらっしゃるとは、私にも驚きです——こうなりますのは私には当然のことでした、といいますが私にはあまりにも孤独でどうしようもなかったのです。……こういう場合に最初の妻が全く忘れ去られるという風に世間では考えられていますけれど、二度目の結婚が必ずしも古い愛情を消し去るものではないと私の経験から言ったりしますと、あなたは驚かれるかもしれませんね」。「あまりにも孤独でどうしようもなかった」と自らを感じたハーディにとって、フローレンスはそこから救い出してくれるのに、どうしても必要な人であったのだろう。

フローレンスの方も結婚後の2月13日にCockerell夫妻に次のように書いている。

私が彼との結婚に踏み切りましたのは、私の献身的な気持ちを表しても構わないのではないかと——そしてあの方が気持ちよく幸せに暮らしていられるように、お助けしてもよいのではと思ったからです。もし結婚しなかったら私はマックス・ゲイトにとどまり続けることはできなかったでしょうし、そうなればあの方が私の世話を一番必要となさるときに、あの方のお側にいられなくなることを恐れたのです。

エマの死の数年前から始まり、親密さを増していた二人の関係ではあったが、フローレンスの気持ちはそれほど単純なものではなかった。Millgateはフローレンスのハーディへの感情を「ハーディへの英雄崇拜的な畏敬の念、自分の文学的野心、献身的な愛を尽くしたいという気持ちと自分の利益にもなる(彼の名声とともに自分も世間の脚光を浴びるといった)思いが混じり

合ったもの」と評している (*Life and Work*, xvii)。マックス・ゲイトの女主人として君臨することになるフローレンスではあったが、彼女の内心はハーディに対して微妙に批判的でさえあった。

つとに結婚に至る前から、フローレンスはマックス・ゲイトを包む異様な雰囲気感到に怖れを感じていた。1913年1月30日のエンフィールドから E. Clodd に宛てたフローレンスの手紙は、エマへの痛恨の思いにうちひしがれるハーディを冷たく見ている様子をまざまざと示す。エマの死の直後からマックス・ゲイトに滞在するフローレンスがドーチェスターのゴシップの種になり始めていることに、ひどく神経質になっているハーディを伝えた後で、次のように続く。

ハーディ夫人に捧げた花輪には『孤独な夫より変わらぬ愛をこめて』と書かれていました。あのご立派な夫人の美点は今や私の両肩にずしりとのかかかってきています。今朝はそのことで3ページにわたって書かれたものを受け取りました。数ある美点の主なもののなかで、今や一番が彼女の厳格な福音主義の考えのようです——彼女の宗教心と彼女の人道主義(猫ちゃんたちへの意味で彼は言っているのでしょうか)ですって。……彼の手紙はこう終わっているのですよ。『もう一度あなたがここへやって来たら、あなたをしっかりとつかまえて離しませんよ。あなたは春までここにとどまって下さい。昨日はととても哀しく淋しかった。今日は少しましですが』ですって。

このようにハーディからの恋文の中身までを他人に知らせるとは。フローレンスはかなり冷たくハーディを見つめている。フローレンスにはハーディが慚愧の念のあまり、エマの狂信的な宗教心にまで盲目になっていくのが、許せなかったのであろう。1913年3月7日、コーンウォールへの旅に出たハーディについても Clodd へ書いた。「あの方は木曜日に夫人のお父様のお墓を見つけるのだとプリマスへ旅立ちましたわ(——あのご立派な紳士のですよ、あの人は『我が家族の一員になろうなどと思いがっている成り上がり者』と書いてきましたのにね。今日はコーンウォールの聖ジュリオット教会へ行きます。そこで初めて“聖人となった亡き妻”に43年前のこの週に出会ったのですからね」と。

1913年12月3日の同じく Clodd への手紙では「ハーディ氏はこれから彼女の思い出のために私に喪に服したような服装をすべきだと言うのです。

時々私は思うのですがここマックス・ゲイトの雰囲気には人を狂わせるようなものがあるみたいです」と。さらに付け加えた。「本当にいつでもハーディ夫人はとんでもなく理想化されているのです——彼女は今までこの世に存在したことがない、もっとも愛らしくもっとも才能のあるもっとも美しい女性だと、彼は口にするし本気で信じていると私は思います」と。もう手の届かない世界へと去っていったエマはハーディにとってますます理想化されることになった。

エマの亡霊は現実には彼女の姪である Lilian Gifford という形でもフローレンスに向かってきた。フローレンスにとってリリアンは小型のエマであった。フローレンスは Clodd にこぼした。「あの女はギフォード家がたいそうな家柄だということ、伯父のロンドン大司教のこと、そしてハーディの親戚が田舎者ばかりということで、いつも頭をいっぱいにしているのです。そして『伯母の助けがなかったなら、ハーディはけっしてこのような偉大な作家にはなれなかった』と言い張るのです。あの女は言ってみれば小型のハーディ夫人ですよ」(1913年1月16日 Clodd 宛)。「彼女(リリアン)は一日に何度でも伯母がいかに偉大なレイディであったかを繰り返すのです。そうすることで私が賤しい出自だということをあてこするのですから(1913年8月21日 Clodd 宛)。「ともかく彼(ハーディ)はあの子は——伯母みたいに——“無邪気な子供っぽい女”なんだよって言うのです、たいして考えもしないで。子供っぽいなんてとんでもない、34歳にもなっているのですよ。でもハーディに話しかけるときはまるで10歳の子供みたいな口をきくんです。……彼女は家のなかの仕事はなにもしません。ほんの些細なことを手伝ってと頼みますとこう言うのです(とつても誇らしげに)。“わたしはそんな育てられ方はしていません。自分で働いて稼ぐなんて”ですって(1913年12月3日 Clodd 宛)。フローレンスは自ら教育を受け、自立を目指して教員となり、文筆家として身を立てようと努力をしてきたというのに、なんらの苦勞もしないで、階級意識をひけらかすリリアンはフローレンスには許しがたい存在であった。同じ手紙でフローレンスは書いている。「ハーディ氏はこの侮蔑に20年以上も耐えてきたのです。しかもそれをとつても楽しんできたみたいです。彼の話聞いておきますと。ですが私はこんなこと真っ平ですわ」。

フローレンスにとってリリアンとの戦いは人生観を賭けた生き方の戦いでもあったから、彼女を認めることはできなかった。結局、リリアンが去るか、フローレンスが去るかというところまで険悪になった二人の関係はリリアンが去ることで結着がついた。フローレンスはマックス・ゲイトの女主人とし

て一家の采配を揮うことになった。

一方ハーディの方はフローレンスにはエマへの喪に服すように要求するのと同様に自分もエマへの悔恨と追慕の念に溺れていった。フローレンスは1914年7月22日、Lady Hoareに書いた。これは新婚間もない妻が書くにはあまりにも哀切な手紙と言える。「夫には家事管理人が必要だったのです。家事管理人であり、本を読んでもくれる住み込みの話し相手とか——それで私がこの家に入ったのです……」。

そのようなフローレンスの立場を顧慮することもなくハーディの方はエマへの思いを詩に噴出させた。『人間状況の風刺』の“Poem of 1912-13”はフローレンスを打ちのめした。詩集出版直後の1914年12月6日フローレンスはまたLady Hoareに宛てて書いた。

でもあなた様には打ちあけてしましますが——ほかのどなたにも決して言うつもりはないのですが——この詩集は私をひどく苦しめます。でも恐ろしいけれど読まずにはられないのです。私には夫があのようなあまりにも哀しすぎる詩集を出版するなんて、私は妻としてまったく失格だと思えます。彼はこの18ヶ月の間落ち込んだ詩など書いていないと言っていますが、でも私はあのような詩を次々と書く人間は人生にまったく飽き飽きして——この世のものなど何も心にかけていないとしか思えません。もし私がもう少し違ったタイプの女でしたら、そして彼の妻にもう少しふさわしかったなら——夫はあのような本を出版したでしょうか？

この結婚は良いことだったのだろうか、フローレンスの心は千々に乱れたのではなかったか。続けてフローレンスはLady Hoareに伝えた。「ええ、勿論私にはわかっていますわ。夫は私に対して穏やかな愛情——ちょうど父が娘に持つような——いつもそんな感じの——情熱というものとは全く違った——を抱いてくれていること。そして私も夫に対して、時に母親がなにか困っている子供——優しく出来る限りの愛情で優しく接して欲しいと望んでいる——に対するような気持ちを抱くのです」(1914年12月9日)。このようななかで二人の結婚生活は始まった。

フローレンスの試練——仕事の山とキャリアへの願望

マックス・ゲイトでフローレンスを待っていたのはエマの亡霊だけではな

かった。彼女を待っていたのは膨大な仕事の山であった。フローレンスにはまずマックス・ゲイトの管理者としての仕事があった。一家の金銭上の管理から、召使いたちの監督、ハーディの食事も含めた生活の管理、そして晩年につれて数を増した驚くほどの客の接待など、全ては当然のこととして要求された仕事であった。それに加えて、そして何よりもハーディにとって大切なことは、おびただし手紙への返事を書くこと、そして彼の詩や序文などや秘密裡に進められていた『ハーディ伝』の資料をタイプするという仕事であった。さらに毎日愛犬ウエセックスを伴っての散歩があり、夕食後はハーディの求めに応じて書物を大きな声で朗読しなくてはならなかった。

フローレンスの友人であり、1920年頃まで親しい関係にあったJoyce Scudmoreはハーディを手厳しく批判して書いている。

ハーディは私に来ていることに腹を立てているように見えました。事実彼は夫人が彼の言うとおりにすぐ自由にならないと気に入らないので、そういう原因になる人には誰にでも腹を立てたのです。……私と夫人がおしゃべりをしていたら、時々ハーディ氏がドアのところから顔を出して妻に向かって言ったものでした。「私の方はもういいのだが、あなたさえよければ」。すると夫人は私にこう言ったものでした。「ごめんなさい、失礼するわ。夫が用事があるみたい」(Pite 424)

Scudmoreによれば、フローレンスは「いつも夫に独占されて」おり、あの結婚は「愛情からというより、便宜上のための結婚だ」と決めつけた。

結婚直後からフローレンスは自分の仕事を続けるのは難しいと感じ始めた。1914年3月20日にはR. Owenにこう嘆いている。「本当に残念でたまりませんが、たった今出版社に執筆を断ったところなの。犬についての本で、あの素晴らしい画家Detmoldが挿絵を担当することになっていたのに。それに何冊も書評も頼まれているのですが、外のお仕事を沢山引き受けるのは夫に対してはよくないことでしょうね」と。フローレンスは自分の悩みはひそかにOwenに洩らすことしかできなかった。

前述したLady Hoareへの手紙で、自分が家事管理人だと嘆いたあとで、こうした雑用の山を前にして、自身の仕事は諦める方がよいのだろうかと問うている。「私は——夫のことを考えて——私の物書きの仕事は諦めるべきでしょうか？それは本当にたいしたことではないのですものね」と。そして、フローレンスは結局ハーディを支える仕事と全力で格闘せざるをえなくな

り、彼女自身の仕事への夢は次第に遠のいていく。フローレンスの嘆きの声はその後も手紙の所々に見いだされることになった。「私の全てのエネルギーと時間は手紙を書くことに使われています。それらは私自身の仕事に使われてキャリアを形成できていたはずなのに」(1917年12月13日 R. Owen 宛)。1922年10月15日付けのOwen への手紙にもこう書かれている。「ほんの少しでも空いた時間があると、返事を書かなくてはならない手紙の山がなだれのように私の上に襲いかかって来て、休むことも、読むことも、菜園でちょっと仕事をすることもできないのです」。山なす雑用のために、自分の才能を伸ばすことも出来ない、「時間さえあれば(私だって)遥かに良い仕事できていたのに」(1922年10月30日 Ernest Rhys 宛)と悩みを切々と訴えている。ジャーナリストと作家の卵として売り出し中のフローレンスの背を親切に押しつけたハーディの姿はここにはない。ハーディはフローレンスが公的な仕事に関わることにしても反対し続けた。そして皮肉なことに、ハーディの死後フローレンスはドーチェスターの幾つかの公的機関の委員に選ばれ、その仕事は後世高く評価されたのである。

マックス・ゲイトの女主人として

フローレンスを迎えて、マックス・ゲイトの生活の秩序は次第に整えられていった。そうしたなかでハーディは年齢の衰えをみせるどころかますます創作活動を活発化していったし、さらに文壇の長老として文人たちやジャーナリストらとの交流は華やかに続いていった。ハーディの名声は英米は勿論世界中に知られ、世界中から作家やジャーナリストたちがマックス・ゲイトに殺到し、そのなかには有名人の生活を覗きみたいという無責任な観光客などもいたから、いかに訪問者を選別し、いかに乱暴で無作法な観光客からハーディを守るかということがフローレンスの役目になった。

マックス・ゲイトを訪問した綺羅星のごとき有名人の名前はハーディやフローレンスの書簡やマックス・ゲイトのVisitors' Book から知ることができる。いわゆる「マックス・ゲイト詣で」と呼ばれた事象であった。Siegfried Sassoon は1918年11月7日に初めてマックス・ゲイトを訪ねてからハーディの死まで少なくとも10回は訪ねたとされている。1930年に桂冠詩人となったJohn Masefield 夫妻は1920年代に少なくとも4回マックス・ゲイトに滞在した。G. B. Shaw と妻は1916年4月28日にマックス・ゲイトを訪ねた。John Middleton Murry は妻のKatherine Mansfield と共に1921年5月26 - 27日に滞在した。John Galsworthy は1915年9月28日に訪ねている。

Rebecca West と H. G. Wells も 1918 年 1 月 29 日に訪問している。20 年代に入ると T. E. Lawrence (Lawrence of Arabia) や Woolf 夫妻の訪問もあった。E. M. Forster は 1922 年、1923 年、1924 年と訪ねている。J. M. Barrie は頻繁に現れた。フローレンスは 1918 年の初め、「今日は誰もお茶に来ないわ。なんとほっとすることでしょう!」と日記に書いた (Millgate 525)。⁽³⁾

1921 年 7 月 2 日にハーディはヘニカー夫人に宛てて書いた。「このところ何人かの楽しいお客がありました——主として詩人たちでしたが。最近かなり多くのジョージ朝の詩人たちと知り合いになりましたが、彼らに対して私はまるで父親のような、あるいは祖父のような感情を抱きます。Siegfried Sassoon が来ましたし、Walter de la Mare や John Masefield も。それから来週は Galsworthy 夫妻がロンドンへの道すがら立ち寄ることになっています」と。

こうした多くの客人たちをフローレンスは手厚くもてなした。ハーディは若いジェネレーションの詩人たちからも尊敬の念をもって見上げられる存在となっていた。ハーディの崇拜者であった Sassoon は 1919 年のハーディの 79 歳の誕生日のために「詩人たちからの贈り物」を計画した。それは 43 人の詩人たちの手書きの詩をまとめたもので、10 月にハーディに贈られた。そこには当代を代表する著名な詩人たちの名が並んでいた。その時の桂冠詩人 Robert Bridges から始まり、W. B. Yeats、D. H. Lawrence、Robert Graves、Sir Henry Newbolt、Sir Arthur Quiller-Couch らの名が連なっていた。ハーディは晩年に至るまで、詩人として実に柔軟に新しい実験を試みたのだが、彼のこの精神の若さはこうしたジョージ朝の詩人やモダニストの詩人らの様々な新しい試みを抵抗なく受け入れる進取の気風に由来したのではなかろうか。新しい時代の詩人らが唱導する価値観を進んで認めたのである。このようなハーディの生き生きとした老後の精神の有り様は若い世代との豊かな交流にも起因したし、若い世代をこうしてマックス・ゲイトに招き入れたのは、若くて美しいフローレンスの心遣いと親切なおもてなしでもあったと言えよう。

このような社交のハイライトは 1923 年 7 月 20 日の皇太子のマックス・ゲイト訪問であろう。ごごちない二人の対面だったとも言われるが、ともかくハーディ夫妻は皇太子の訪問をうけて時の人としての面目を施したことは間違いない。ハーディはこうした来客との交友を楽しみながら、しかも着々と自分の仕事も進めていた。

ハーディの規則正しい生活については 1921 年から 1928 年までマックス・

ゲイトの部屋付きメイドを勤めた Ellen Titterington が語っている。ハーディ夫妻の生活は実に規則正しく、朝食は9時、日曜の朝は必ずソーセージが出た。昼食のあとは必ずデザートにカスタード・プディングがついた。そして午後4時にはほんのちょっとした食事がお茶と一緒に出されたが、それは非常に簡素なものでバタ付きパンとホームメイドのケーキ少々だったが、それらは客人にも供された。パンをウエハースのように薄く小さく切るように教えられたとき、Titterington はこれでお腹の足しになるのかと心配したという。晚餐は7時30分ときまっていた。晚餐のテーブルが片付けられると、夫人は10時まで、あるいはそれよりも遅くまで夫のために朗読をした (Gibson 151-3)。こうした規則正しい生活はハーディの健康を守り、彼が書齋で仕事をする時間を確保すれにはどうしてもかせないものであったろう。Titterington は語っている。「(ハーディの) 親しい友人たちの限られたグループの一員でないかぎり、(ハーディに会うためには) 事前に約束を取ることが必要でした。そうしないかぎり、ほとんど誰も家には入れませんでした。……約束が必要だと言う私たちの説明を受け入れないで、しつこく面会を求める訪問者らには特別に用意したカードを示しました。それにはこう書いてありました。『あなたが約束をとりつけていないかぎり、ハーディ氏には会えません。手紙を書いて約束を取って下さい』と。大体の訪問者はわかってくれましたが、なおもしつこい人らにはそのカードを見せてドアを閉めたのです」。おかげでハーディは毎日10時間から12時間を書齋で机に向かって過ごすことができたのである。かつて小説を書いていたときと同じように。

フローレンスの固いガードは様々な不評を買ったが、彼女は断固として自分の信念を貫いた。1920年夏のこととして、Marjorie Lily が書いている。

ある午後お茶の時でした。玄関のあたりが突然騒がしくなりました。どこからやって来たのか一団の観光客たちが庭に入り込み、家の中に侵入してきたのです、大騒ぎをして。「おお、大変だ、フローレンス! 追い出してくれ!」とハーディ氏がうめき声を上げました。ハーディ夫人は立ち上がり、玄関へ向かい独り闖入たちと向かい合いました。運悪くまわりに召使いの姿も無く、ウエセックスもあたりにいません。食堂の物陰にハーディ氏と私はいつ襲われるかもしれないと覚悟して小声でささやきながら、縮こまっていました。闖入者たちは勇み立っていましたが、激しい抗議や言い合いや大騒ぎの後で、ついに引き下がりました。夫人のもの静かですが毅然とした懇願に負けたのです。(Gibson 145-6)

おそらくこのような状況は度々起こったことであろう。フローレンスは敢然としていつもハーディを守ったのだ。1923年から秘書として勤めた May O'Rourke はハーディの生活が実に規則正しく、克己心にみちたものであったと述べている (Gibson 188)。

ハーディの方はこうして自分の生活をフローレンスに頼り切っていたのかもしれない。1922年12月17日にフローレンスは Sydney Cockerell に宛てて書いた。「彼は私に何かあったら身を投げて溺れ死ぬつもりだなんて言ったのです。それはお世辞のつもりでしょうけれど」と。たしかにフローレンスはハーディの規則正しい生活をしっかりと支えた。彼の生活全般を管理し、健康に留意し、秘書としてタイピストとして彼の文筆活動を支え、手紙の返事を替わって書いた。さらに重要なことは39歳近くも若いフローレンスは自分の世代の文学的関心を夫に伝え、夫を新しい世代への好奇心に目覚めさせ、夫の精神をも若返らせたのではなかったか。晩年にハーディに会った人たちがそろって彼の肉体的な敏捷さと旺盛な好奇心、それを表す輝く目、しなやかに反応する精神などを伝えている。晩年においてもハーディの読書範囲は極めて広く、文学も古いものから新しいものまで、多彩であった。1926年10月31日の Edmund Blunden へのフローレンスの手紙では夜の朗読が最新の H. G. Wells の *William Clissold* (1926) から Aldous Huxley の *Jesting Pilate* (1926) に及んでいることを告げているが、そのなかでフローレンスは次のようにも述べているのは興味深い。「Arnold Bennett の *Lord Raingo* は私のみるところ耐えられないくらい品が悪いので T. H. に読むことはしていません」。朗読の本はハーディの希望によったものでもあったが、フローレンスが選んだものも含まれたのである。フローレンスの若い感性はハーディにも新鮮な活力を与えたであろうと思われる。次第に歳を重ねたハーディが様々な面でフローレンスに依存度を強めていったことは当然であろう。

しかしこのような絶え間のないプレッシャーにさらされ、かつ毎夜、大声で朗読しなくてはならないといった生活はフローレンスには大きな負担であった。フローレンスは1924年9月30日ついに思い切ってロンドンで耳下腺の腫瘍の手術を受けた。手術は成功したが、以後フローレンスから病氣への不安と怖れが消えることはなかった。大きな手術を受けた者としてそれは当然な不安であったろう。フローレンスがロンドンから帰ってくるのを待つハーディの心情がうたわれたのが「誰も来ない」である。

誰も来ない

木々の葉が上下にざわざわと揺れ
その隙間から微かな明るさが
忍び寄る夜の闇にのみこまれる
道路では電信用の電線が
暗くなった台地から町へと
旅人にむかってまるで亡霊の豎琴のような調べを奏でる
亡霊の手でかき鳴らされているかのように

一台の車がやって来るギラギラとライトを光らせて
それは木や葉を照らし出す
だがわたしには何の関係もない
見る間に音立てて自分の世界へと消えて行く
さらに深い闇を残して
そして再びわたしは独り黙して門のそばに立つ
そして誰も来ない

1924年10月9日

マックス・ゲイトでフローレンスの帰りを待つ、老いたハーディの不安な、たよりない心情が切々と伝わってくる詩である。

しかしこの後、以前からあったハーディのHardy Playersの花形女優であるGertrude Buglerへの関心が、ハーディの一方的な愛着のみで人目につくほどになる、といった事態となり、病後のフローレンスは我を忘れて、直接Buglerにテスへの出演辞退を頼みに彼女の自宅を訪ねるといった事件が起こったりした。ハーディ84歳のことである。

ロンドンの『テス』上演は成功裡に続き、1925年11月20日には第7詩集『人間の見世物』が出版された。5000部というのは詩集にしては注目すべき数の出版であり、この詩集もまた内容、形式ともに詩人ハーディの本領を見事に発揮したものであった。このようななかでハーディとフローレンスが密かに計画していたことがあった。それが『ハーディ伝』の執筆だったのだ。

『ハーディ伝』の秘密とフローレンスの反撃

ハーディの文学世界を論じるとき、フローレンスの名を不朽のものとする

のはフローレンス・ハーディ著とされている『ハーディ伝』の存在であろう。ハーディの死後、*The Early Life of Thomas Hardy 1840-1891* (Macmillan, 1928) と *The Later Years of Thomas Hardy 1892-1920* (Macmillan, 1930) が出版され、のちに *The Life of Thomas Hardy 1840-1928* として1962年にMacmillanからまとめて出版された。これがハーディ文学の理解のための鍵となる重要な伝記であることは言をまたない。

しかし *Early Life* が死後あまりにもすぐに発表され、その出版の経緯からして、これらの書物がフローレンス単独で書かれたとは当初から信じられてはいなかった。Purdyは「ハーディ夫人が著者として名を出してはいるが、彼女がした仕事はわずかな編集上の些事にすぎず、全体を通して書いたのはハーディである」と、つとに喝破していた (Purdy 265)。Millgateによれば最後の37章と38章が完全にフローレンスの手になるという (*Life and Work*, xxxiii)。

このけっして単純ではない執筆の秘密に迫るために、まず『ハーディ伝』執筆にいたる事情から見よう。ハーディ自身は自らの作品を除いては自分について語ることはしないと公言していたのだが、自分に関して間違った叙述や解釈を含んだ伝記が書かれるに至って、こうした誤解を放置しておくことに次第にいらだちを感じ始めていた。伝記として書かれたものには F. A. Hedgecock, *Thomas Hardy, Penseur et Artiste* (Paris, 1911) や Ernest Brennecke, Jr, *The Life of Thomas Hardy* (New York, 1925) などがある。さらに長年の友人である Edward Clodd がハーディの伝記を書こうとしているという噂もあった。

そういう中で、1914年ハーディの著作権執行者となった Sydney Cockerell はハーディにあなた自身について、あなたの過ごしてきた青春について何か書いておかれた方がいいのではないかと強く勧めた。そしてなんと幸運なことには、あなたには若く有能なタイピストであり、しかも文筆家として、ジャーナリストとしての実績を持つフローレンスという願っても無い協力者がいるのではないかと。フローレンスもこの点では自分の能力を発揮できる場が出来るとして非常に乗り気になり、Cockerell と一致してハーディを説得した。ハーディは1915年の終わりあたりから、この『ハーディ伝』の仕事に強い関心を示し始めることは残されたフローレンスの手紙などから見て取れる。

1917年の夏にはハーディは『映像の見えるとき』の校正をしていたが、その9月9日にフローレンスはCockerell に書いた。「この仕事(校正)がすんだ

ら、彼は私に伝記的な資料をくれることになっています……私はこの仕事がとても気に入っています」と。こうしてハーディもフローレンスも乗り気になって始められた仕事は1918年の初めごろまでには、二人の間で確立されたシステムとして機能し始めていた。書斎でハーディが集めた資料をもとに手書きの原稿を書く。それをフローレンスがカーボンを用いて3枚のコピーにタイプする。一番上のタイプされたものは印刷屋へ渡すもの、2番目のコピーは夫妻用の記録として保存され、3枚目のコピーは加筆訂正用としてハーディが自筆で自由に手を入れた。その変更はフローレンスによってすぐにタイプで打ち直された。ハーディ自筆の加筆訂正はけっして印刷屋にはわからないように仕組まれたのである。そして印刷屋用のものに変更が移されると、その後ですぐに使用した資料は全て破棄された。

しかし Purdy が指摘するように、ハーディは自分の筆跡を隠すために、建築家としての修行中に習った楷書体で書き込みをしたコピーを残している (Purdy 272-3)。自分が書いて手をいれたことを隠すために取られたシステムではあったが、所々ではこぼれを見せていた。さらにハーディは執筆のために集めた資料は使用後全てマックス・ゲイトの庭で燃やしたから、『ハーディ伝』に書かれたこと以外を消し去ったと言える。書かれたものの真偽をたしかめる術はない。だからその意味で Millgate が言うように、それは後世に残したい自分の姿を投影した「自伝」として読まれるべきものかもしれない (*Life and Work*, x)。

1918年を通して、ハーディとフローレンスの間で“Materials”とか“Notes”と呼ばれるこの仕事は続けられ、その結果として膨大な古い資料が灰燼に帰した。1917年5月7日、ハーディは Sir George Douglas に書いている。「過去30 - 40年間の書類を燃やしているが、まるで亡霊が立ち昇ってくるようだ」と。こうして自分にとっての不都合な過去は消された。ハーディはこのあとも次々と資料を付け加え、新しい書き込みを続けた。1926年の7月14日の段階でも、フローレンスは夫がまだ新しい資料を付け加えたり、今までのものを削除したがつたりして、いつ完成するか見通しが立たないと、Daniel Macmillan にこぼしている。ハーディはまさに死の間際まで、この自伝である『ハーディ伝』に手を入れ続けたのである。

Early Life の方は1926年ごろまでにはほとんど完成されていた。ハーディの描いた自我像では、彼の幼少時代は理想化され、彼の階級の貧しさや教育を得るための両親の苦労などは触れられず、エマとの不和の始まりや詳細は書かれていない。執筆がおこなわれていた頃のフローレンスの手紙をたどっ

てみると、幾つか興味深い点が浮かび上がってくる。ハーディとフローレンスの共同作業として秘密に進められた『ハーディ伝』の仕事の実態については Cockerell は気づいていたのだが、1918年2月7日にフローレンスは彼宛にこう書いている。「例の『ノート』のことですが、どんなことがあっても『自伝』だとか『自伝的』だとかという言葉は使ってはいけません。それは判っていますから、こんなことをそっとでも洩らしたりいたしますのは、あなた様だけです」と。その仕事は出版社も含めて、周囲から正式にフローレンスが書いている『伝記』として扱われていたのであるから。⁽⁴⁾

フローレンスの遺言執行人である Irene Cooper Willis はこの『ハーディ伝』について次のように書いている。

夫人が私に話したところでは、この伝記の大部分はハーディ自身が書いたということです。何年もの間、彼はひそかにこの仕事に没頭していて、彼女はただ少しばかりの追加とか修正をただけだったそうです。ハーディは夫人が写しを作ると元原稿をすぐ捨てるようにとくどくどと言いました。そうすることで彼女は自分が何を付け加えたのか思い出すことはできませんでした。このことに関してハーディはものすごく秘密主義でした。彼女に対してさえも。そのため、彼が書いている時、彼女が書斎へ入って行ったりすると、机で仕事をしていれば、あわてて吸い取り紙の下に書いているページを隠したものでした。(Roberts 80)

ハーディは自分がただ資料を提供しただけで、あくまでそれは夫人が客観的に書いた伝記であるという形式を守り続けた。その秘密主義は至る所でほころびをみせていたにもかかわらず。

事実ハーディは死の数日前まで『ハーディ伝』の再考をしたり訂正をしたりしていたから、彼の死をもってその執筆はようやく終わりを迎えたのである。Early Life の方はほぼ完成していたから、フローレンスにとってあまり問題はなかったようである。勿論彼女は見直しの結果削除などは大胆に実行している。しかし問題は Later Years の方にあった。最後の10年くらいはハーディのノートが残されているにすぎなかったし、当然のことながら、ハーディの死そのものも含めて新しく書き足されなくてはならない部分が多々あった。それらをどのように書き加えて、かつ書かれたものを見直して加筆訂正もして、出版に漕ぎ着けるか、ハーディ死後のフローレンスにとっては大問題であった。

フローレンスはJames Barrie, Harold Child, E. M. Forster, T. E. Lawrence, Siegfried Sasoonなどに助けを求めた。BarrieとChildが特にフローレンスを助けた。二人はハーディが残した原稿全てに目を通し、完全に満足したと1929年8月10日、フローレンスはHarold Macmillanに書いている。それまでである意味ではハーディの原稿をタイプしていたにすぎなかったフローレンスに、出版を前にあらためて全ての見直しという重責がのしかかってきた。何を削除し、何を付け加えるか、が問題であったが、フローレンスにはまずハーディが書いていたことに対する押さえていた不満があった。エマと自分の扱いである。エマと自分が書かれる頻度はあまりにも違いすぎた。エマとのあの不和は一体何だったのか、エマの*Some Recollections*の一部はそのまま引用されている。何れにしても、エマはあまりにも書かれる頻度が多い。イタリアで泥棒からハーディを守った部分は削除された。旅行中のエマが煩った病氣のこともカットされ、ハーディが冷たかった原因とされた。

こうした生々しい事情を白日のもとに明らかにしたのが、Millgate編の*The Life and Work of Thomas Hardy* (Macmillan, 1894)であった。Millgateは完璧な形で残っているのは二番目のカーボンコピーだけという状況の中から、困難な作業の後に、ともかくハーディが書いた形を探りだした。その結果、フローレンスが加えた削除変更も(句読点などの細部はさておいて)初めて明瞭に浮かび上がったのである。これは画期的な仕事となった。我々は初めて、ハーディが書いた自伝を知り、ついでフローレンスが行った削除訂正の内容とそのプロセスを理解したのである。

フローレンスがタイプしたものを常に監督するハーディがいなくなって、フローレンスは初めて友人らの忠告を聞きながら、自分の判断で、ハーディの原稿に手を入れた。ロンドン上流階級の人々の名前の羅列や、批評家へのあまりにも過敏なハーディの怒りはハーディの人格にかかわるとして削除された。こうしてそれらをあえて書き入れたハーディ本来の意図は消されたのだ。

Millgateは‘Selected Post-Hardy Revisions in *Early Life and Later Years*’において細部にわたる削除改変を検証している。その細部についてはMillgateの優れた分析に任せるとして、筆者にとってもっとも興味深かったのは、フローレンス自身についての部分である。ハーディの原稿ではフローレンスはエマの友人として登場する。「Miss Dugdale, a literary friend of Mrs Hardy's at the Lyceum Club, whose paternal ancestors were Dorset people dwelling near the Hardys, and had intermarried with them some 130 years earlier.」(*Life and Work*, 378)となっているが、この補足された箇

所は一体なんの意味を持つというのか。なにかをカムフラージュする意図が見え隠れする。フローレンスはばっさりとこの部分をカットした。さらにあの有名な文章である。「In February of the year following (1914) the subject of this memoir married the present writer, who had been for several years the friend of the first Mrs Hardy, and had accompanied her on the little excursions she had liked to make when her husband could not go.」(*Life and Work*, 392)そして前の箇所と同じように、昔のダグデイル家とハーディ家の交渉云々が続く。ここでも、who以下は削除された。Miss Dugdaleとはエマの友人としてあるいはカムパニオンのように、マックス・ゲイトに入りしていた女性にすぎなかったとは!フローレンスにとってこれ以上の屈辱があろうとは思えない。削除は彼女の精一杯の反撃であろう。フローレンスにとって、消すべきはエマではあったが、このような形で自分を伝記の中に登場させて、それを世に認めさせようとするハーディもまたその部分は消されるべき相手であったと言えるのではなかったか。

しかしフローレンス自身の手になるハーディ最期の場面は哀切で感動的である。死の少し前ハーディは「オマル・ハイヤームの『ルバイヤート』から、“おお、卑しき土くれより人を作りし汝よ”で始まる詩を繰り返し読んで欲しいと言いだした。彼の蔵書からこの作品を手に取り、ベッドの傍らから読んで聞かせた。

おお、卑しき土くれより人を作り、
 楽園共々蛇まで生み出した汝よ。
 人の顔をけがす罪一切に対し、
 人への許しを与え、人の許しを受けるがよい!

亡くなるほんの少し前まで意識ははっきりしており、心臓発作で1月11日夜9時過ぎにこの世を去った」。死の「一時間後、再びベッドの傍らへ行って死に顔を見てみると、これまで目にしたどのようなものとも違う、人間の表情には普通みられない面持ちであった。それは人の想像を超えた、輝ける勝利の表情であった」。そしてその「翌日は比類のないほど光彩を放って夜が明けた。燃え立つような素晴らしい空が、幕を広げるように、歩哨みたいにたたずむ黒々とした松の木々の上へと広がっていった」⁽⁵⁾とフローレンスはその死の状況を描いた。こうしてハーディ最後の作品『ハーディ伝』はフローレンスの流麗な文章で飾られて終わる。彼女の密かにしかし確実に行われた

反撃の証拠を内に秘めながら、『ハーディ伝』は実に不思議な、ハーディとフローレンスの合作となったのである。そしてハーディの死後フローレンスにはまずその葬儀をめくり、そして遺作遺品などの管理をめくり、さらにマックス・ゲイトの行方をめぐり様々な問題が残されることになった。

注

- (1) 詩集名と詩のタイトルはハーディ全詩を翻訳された森松健介氏の訳を使用させていただいた。詩の本体は拙訳による。
- (2) トマス・ハーディはアルバート・アインシュタインに早くから強い関心を持っていた。蔵書のなかにC. Nordmann, *Einstein and the Universe* (Fisher Unwin 10/6)があることが知られている。(Bailey, 615) (Evelyn Hardy 116)
- (3) マックス・ゲイトの訪問者やVisitors' BookについてはGibsonを参照した。
- (4) フローレンスは1926年7月5日のSiegfried Sassoon宛の手紙で“an official biography”という言い方をして自分が書いていることを強調している。
- (5) 『トマス・ハーディの生涯』井出弘之・清水伊津代・永松京子・並木幸充訳(大阪教育図書、2011) 500-1。

Bibliography

- Asquith, Cynthia. “Thomas Hardy at Max Gate,” *Monographs on the Life, Times and Works of Thomas Hardy: No.63*. Beamster: The Toucan Press, 1969.
- Bailey, J. O. *The Poetry of Thomas Hardy*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1971.
- Bugler, Gertrude. “Personal Recollections of Thomas Hardy,” *The Dorset Natural History and Archeological Society*. Dorchester: 1964.
- Gibson, James, ed. *Thomas Hardy: Interviews and Recollections*. London: Macmillan, 1999.
- Gittings, Robert and Jo Manton. *The Second Mrs Hardy*. London: Heinemann, 1979.
- Hardy, Evelyn, ed. *Thomas Hardy's Notebooks*. London: The Hogarth Press, 1955.
- Hardy, Evelyn and F. B. Pinion, ed. *One Rare Fair Woman*. London: Macmillan, 1972.
- Hardy, Florence E. *The Life of Thomas Hardy 1840-1928*. London: Macmillan, 1975.
- Hardy, Florence E. *The Life of Thomas Hardy 1840-1928*. Trans. Hiroyuki Ide, Itsuyo Shimizu, Kyoko Nagamatsu, and Yukimitsu Namiki. Osaka: Osakakyouikusho, 2011.
- Hardy, Thomas. *The Collected Poems of Thomas Hardy*. Trans. Kensuke Morimatsu. Tokyo: Chuo University Press, 1995.

- Hardy, Thomas. *The Complete Poems of Thomas Hardy*. Ed. James Gibson. London: Macmillan, 1978.
- Meech, Dorothy M. "Memories of Mr and Mrs Thomas Hardy" *Monographs on the Life of Thomas Hardy*: No. 12. Beaminster: The Toucan Press, 1963.
- Millgate, Michael, ed. *Letters of Emma and Florence Hardy*. Oxford UP, 1996.
- . ed. *The Life and Works of Thomas Hardy*. London: Macmillan, 1984.
- . *Thomas Hardy: A Biography Revisited*. Oxford UP, 2004.
- O' Rourke, May. "Thomas Hardy: His Secretary Remembers," *Monographs on the Life, Times and Works of Thomas Hardy* :No.8. Beaminster: The Toucan Press, 1965.
- Page, Norman, ed. *Oxford Reader's Companion to Hardy*. Oxford UP, 2000.
- . ed. *Thomas Hardy: Family History Vol. I-V*. London: Routledge, 1998.
- Pinion, F. B. A Commentary on the Poems of Thomas Hardy. London: Macmillan, 1976.
- Pite, Ralph. *Thomas Hardy: The Guarded Life*. London: Picador, 2007.
- Purdy, Richard Little and Michael Millgate, ed. *The Collected Letters of Thomas Hardy Vol. I-VII*. Oxford UP, 1978-1988.
- Purdy, Richard Little. *Thomas Hardy: A Bibliographical Study*. Oxford UP, 1954.
- Roberts, Marguerite. "Thomas Hardy and the Max Gate Circle." *Thomas Hardy Year Book 9*. Guernsey: The Toucan Press, 1980.
- Winslow, Donald J. "Thomas Hardy' s Sister Kate," *The Thomas Hardy Society Monograph. No.2*. Langport: The Thomas Hardy Society, 1982.